

# J.S.S.W NEWS

No.129

Contents

## 日本ソーシャルワーク学会通信

2021年3月15日

【発行責任者】 小山 隆

【編集責任者】 荒井 浩道

I. 巻頭言「パンデミック下のソーシャルワーク」……大谷 京子…	1
II. 「2020年度コラボセミナー in 鹿児島」報告 ……………	2
III. 「2020年度RSW共同研究会」報告 ……………	6
IV. 「国際委員会」報告 ……………	8
V. 「第38回大会」開催案内 ……………	11
VI. 「2020年度研究セミナー」開催案内 ……………	12
VII. 「2020年度第3回理事会」報告 ……………	13
VIII. 会員の声（2020年度新入会員） ……………	16
IX. 自著紹介 ……………	18
編集後記 ……………	荒井 浩道…19

## I. 巻頭言

### パンデミック下のソーシャルワーク

日本福祉大学 / 学会理事 研究推進第1委員会 大谷 京子

最初に、この未曾有の事態のなかで、社会福祉の最前線で奮闘しておられる方々に、まず敬意と感謝を表したいと思います。

歴史の大きな転換点に居合わせている今、多様な課題が噴出しています。経済活動、社会生活の変化は、社会的弱者とされている方により深刻なダメージを与えます。社会福祉現場では、あらゆる「前例のない」対応に追われています。生活困窮者自立支援関連の相談件数の急増など、多くの相談窓口に大きな負荷がかかっています。日常的な人手不足の中、小学校の休校など家族の事情や自宅待機により出勤できない職員、感染リスクを避けて離職する職員があり、さらに人材確保は危機的状況です。その上、日常業務に加えて感染予防対策が重なっています。こうした中で職員の出勤を減らすことは困難ですし、対面での支援が基本ですから、在宅勤務への移行はほぼ不可能です。多くの施設の中は三密を避けられない構造になっています。クライアントの感染防止と共に、自らの感染予防に、相当の緊張を強いられています。

5月の時点で約8割の通所型事業所では作業収入が減り、減収率平均は4割弱（きょうされん「新型コロナウイルスの影響に関する生産活動・利用者工賃実態調査」）、休業や閉鎖を余儀なくされる事業所もあります。徐々にガイドラインは整備され、これまでの基準の緩和、融資などが出されていますが、こうした状況がいつまで続くのか終わりの見えない中で、疲弊とストレスは限界を超えています。

命を守る専門職である医療従事者に対して、音楽や拍手で感謝を捧げるいろいろな動きがメディアで報じられました。逆に、医療機関や従事者、その家族への差別もありました。これに対して、京都大学IPS細胞研究所長の山中伸弥教授らが「感染者や医療従事者、医療施設に対する差別や偏見を防ぐための方策の検討」のための対話を呼びかける要望書を送ったことを機に、マスメディア関連団体との協議が持たれました。その動きは、一般社団法人日本新聞協会と一般社団法人日本民間放送連盟が「新型コロナウイルス感染症の差別・偏見問題に関する共同声明」という異例の共同声明を出すに至りました。そこでは、感染者と医療従事者やその家族に対する差別・偏見、中傷は決して許されないと考え方を共有し、今後より一層、差別・偏見がなくなるような報道を心がけたいと宣言されています。まさにソーシャルアクションです。重ね

て、日本看護管理学会も、「ナースはコロナウイルス感染患者の最後の砦です」と題する国民向けメッセージを公表しました。そこで「感謝の言葉は要りません。ただ看護に専念させて欲しいのです」と、個々の感染予防への奨励と偏見の解消、ナースの復職支援を訴えました。

高齢福祉・障害福祉・児童福祉の事業所を対象に日本医労連が実施したアンケートでは、「医療現場と同様に介護現場でも命を守っている」という主張がありました。確かに、社会福祉実践は感染者の命を救うものではありませんが、人々の人権と尊厳、生活を守ることを志向するものです。精神保健福祉士協会会長メッセージを引くと、「私たちは無知や偏見による差別を最も鋭く感知できるソーシャルワーカーのはずです。…差別や社会の荒廃には立ち向かうこと」が期待されます。9月によく、新型コロナウイルス感染症対策分科会のもとに「偏見・差別とプライバシーに関するワーキンググループ」が発足し、11月には今後の取り組みに対する提言がなされています。そこでは「介護施設やその従事者」への差別も実態として明記されました。社会福祉に携わる私たちが、さらに声を挙げていく必要性を感じさせられました。

IFSWも、パンデミック状況における倫理的ガイドを発表しました。通常ならば倫理的に間違っているとみなされる、健康への配慮を優先して自由を制限し、面接を避けるといった決断や行為を、非常事態の中で検討するための指針です。実践現場で働くソーシャルワーカーが孤立しないように、私たちにできることを探したいと思います。

「命か経済か」と二項対立で語られることが多いのですが、人権や尊厳、生活が後回しで良いとは思えません。私たち日本ソーシャルワーク学会は、こうした差別や排除をはじめとする、社会が直面している多様な課題に対して、研究を通して貢献することが求められています。

今後もどんな形で学会活動が展開できるのか、試行錯誤が続きます。昨年の初めてのオンライン全国大会では、従来よりも多くの参加者を得、移動のないこと等によるメリットを経験しました。一方で、対面することで生まれる関係や発想、創造に課題が残ることも味わいました。そうした課題を克服するための、新しいツールもどんどん開発されています。未知の活動展開のためには、学会員すべてが、それぞれの持つ知見を持ち寄って参画し、協働してつくりあげていくことが不可欠だと思います。先を予測できない状況ですが、あらゆる可能性を探りつつ、今できる最善の活動を進めていければと願っています。

## Ⅱ. 「2020年度コラボセミナー in 鹿児島」報告

### 「2020年度ソーシャルワーク・コラボセミナー in 鹿児島」の報告

ルーテル学院大学 / 学会理事 研究推進第3委員会 浅野 貴博

研究推進第3委員会では、社会貢献推進事業として、これまで各地域のソーシャルワーク関係団体との協働の下でセミナー等を開催してきました。本年度は第7回目のソーシャルワーク・コラボ企画として、2020年7月に開催された本学会の第37回大会との連動という意図の下、貧困問題を抱える様々な背景を持つ人々に対して、地域を軸としてどのような福祉実践が必要とされているかについて考えるという趣旨で、企画段階から本学会と鹿児島県社会福祉士会が協力し、2020年11月8日にオンラインによるコラボセミナーを開催しました。事前の参加登録者数は108名で、セミナー当日の参加実数は関係者を含めて106名でした（Zoomアクセスレポート）。その約6割は社会福祉士等の実践家の方々でしたが、鹿児島県内だけでなく全国各地からの参加者を得ることができました。多数の方にご参加いただきましたこと、さらに、セミナーの開催にあたりご支援・ご協力いただきました皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。以下にセミナーの概要をご報告いたします。

## 1. セミナーの概要

今年の7月に日本ソーシャルワーク学会の第37回大会がオンラインにて開催された。大会テーマを「ソーシャルワーク～地域・文化固有の知を基盤として～」とし、開催校（鹿児島国際大学）による企画シンポジウムでは、鹿児島の離島という地域固有の福祉実践の様々な活動、そしてそこから得られた知見を共有する機会を得ることができた。今回の「ソーシャルワーク・コラボ」では、上記大会との連動という意図の下、貧困問題を抱える様々な背景を持つ人々に対して、地域を軸としてどのような福祉実践が必要とされているかについて共に考える機会としたい。貧困問題は、生活上の困難として多種多様な形で表面化するが、ソーシャルワーク実践には、目に見える問題への対処に留まらずに、問題の全体像を捉えた上での継続的な支援を地域ぐるみで展開していくことが求められている。その中で、とりわけ地域で声を挙げられない人々に寄り添った支援を展開するためには、貧困問題の支援に携わる公私の様々な担い手が、専門性の有無や違いに関わらずに連携・協働しながら、貧困問題を抱える人々を支える地域づくりを進めることが必要である。そうした地域づくりには、担い手の育成や担い手への継続的なサポートも含まれよう。本セミナーでは、離島を含む多様な地域特性を持つ鹿児島県における様々な取り組みとそこから見えてきた種々の課題等の分かち合いを通して、この問題に取り組むソーシャルワークの意義や期待される役割について改めて共に考えたい。

【開催日時】 2020年11月8日（日）13：00～16：30

【実施方法】 オンライン開催

【プログラム】

13：00 開会挨拶 日本ソーシャルワーク学会会長 小山隆氏（同志社大学 教授）

13：10 基調講演 講師 永田 祐氏（同志社大学 教授）

演題「包括的な支援体制の構築と越境する地域福祉実践」

14：20 シンポジウム「貧困問題への地域福祉実践～地域固有の知の可視化、そして共有に向けて～」

発題1：生活困窮者や貧困家庭の支援実践から

麓 由理子氏（与論町地域包括支援センター / 保健師）

発題2：社会福祉協議会の実践から

柳田 道輝氏（さつま町社会福祉協議会地域福祉係 / 社会福祉士）

発題3：当事者による支援の実践から

鶴田 啓洋氏（一般社団法人 Saa・ya / 精神保健福祉士）

コメンテーター 永田 祐氏（同志社大学）

高橋 信行氏（鹿児島国際大学）

コーディネーター 大島 巖（日本社会事業大学）

浅野 貴博（ルーテル学院大学）

16：20 閉会挨拶 鹿児島県社会福祉士会会長 東和沖氏

主 催：日本ソーシャルワーク学会、（公社）鹿児島県社会福祉士会

後 援：（一社）鹿児島県精神保健福祉士協会、鹿児島県医療ソーシャルワーカー協会、鹿児島県ソーシャルワーカー協会、（公社）日本社会福祉士会、（公社）日本精神保健福祉士協会、（公社）日本医療社会福祉協会、（特非）日本ソーシャルワーカー協会

## 2. セミナーを振り返って

コロナ禍の中でオンライン開催された本コラボセミナーは、鹿児島県社会福祉士会の方々と企画の打合せから、セミナー関係者の方々と種々の打合せに至るまで全てオンラインによって行いました。私を含めた多くの大学関係者にとっては、コロナ禍の中で遠隔授業への対応を余儀なくされたことがあり、オンラインへの対応にある程度慣れていましたが、セミナーの関係者には初めての経験で色々と戸惑われた方もいたのではないかと思います。オンラインでの開催により場所に縛られることなく参加が可能となったことで、例年以上に全国各地から多くの方々にご参加いただきました。

その一方で、セミナーを運営した立場からはオンラインならではの難しさも感じました。通信状況に左右されるリスクをいかに軽減するかというテクニカルな面の課題はもちろんですが、運営側として特に課題と感じたのは質疑応答の時間の持ち方についてです。今回のセミナーでは、Google フォームを用いて参加者の方々からの質問等を受け付ける形にしましたが（チャット機能を使って URL を通知）、寄せられた質問が少なかったということがありました。オンラインだから質問が少ないというような単純な話ではないと思いますが（対面でのセミナー等でも質問が出にくいことは往々にしてありますので）、オンラインならではの難しさの一つではないかと思います。私自身もこれまで大小様々なオンラインでのセミナー等に参加していますが、参加者の立場から質疑応答の際に質問等をしにくいことの理由として、その場の質感を伴った“文脈”を共有することが難しいことがあるのではないかと感じています。対面であれば、講師等を含む参加者の様子をお互いに感じ取ることができますが（それ故に質問等をしにくいということもまた一方であるでしょう）、オンラインでは少人数であってもそうしたことが難しいことは多くの方々を実感されているのではないのでしょうか。そうしたことを思う一方で、そうした実感は、「やはりオンラインよりも対面の方が良いのではないか」という前提があるからではないかと考えたり、技術の進歩によってオンライン上でも質感を伴ったコミュニケーションが可能となる日も近いのではないかと考えています。

次年度以降、本学会の大会やセミナー等をどのような形で開催するかについては、新型コロナウイルスの感染状況によるところが大きいでしょうが、このコロナ禍で新しい当たり前のツールになったオンラインをどのように用いるかは今後継続して検討していくべき課題であると思います。オンラインの用い方を考えることは、これまでの当たり前だった対面での学びの意味、すなわち、同じ時間に同じ場所に共に集まり、その場の文脈を共有することを通して得られる学びとは一体何であるのかを改めて問い直すことにつながるのではないかと思います。今後も様々な形で共同企画を推進していく予定ですので、会員の皆様には、今後セミナー等で取り上げて欲しいテーマ等だけでなく、オンラインの用い方に関してもぜひ率直なご意見をお寄せいただければ大変ありがたいです。

## 「ソーシャルワーク・コラボセミナー in 鹿児島」に参加して ～地域で動ける人を見つける、育てる～

淑徳大学 / 学会理事 研究推進第3委員会 佐藤 俊一

7月の鹿児島国際大学での学会に続き、今回のコラボはテーマもつながるものだった。オンライン開催によって100名近い参加者があり、鹿児島という「地域・文化の固有性」から「貧困問題への地域福祉実践」を通してソーシャルワーカーの役割を改めて問いかけるものとなった。当日の研修の様子を報告者の視点から以下に紹介したい。

最初に基調講演として永田祐氏（同志社大学 教授）より、演題「包括的な支援体制の構築と越境する地域福祉実践」が行われた。60分という限られた時間ではあったが、内容の濃いものであり、同氏の熱意が伝わってきた。内容としては、千葉県銚子市のひとり親の母親が中学生の娘を殺害するという事件を例に、

縦割りの制度で使えないこと、ソーシャルワーカーがいなかった等が指摘される。そこから政策の動向として包括的な支援体制の動向紹介、地域力検討会におけるソーシャルワークへの言及等が示された。具体的には①断らない相談支援②参加支援③地域づくりに向けた支援のつなげていくものである。後半では、これからの地域福祉実践を「越境」をキーワードに行政内、多機関の対象者別福祉制度の越境による協働、福祉の垣根を超えた地域との協働が提言された。その役割を担うのがソーシャルワーカーであり、それを支える制度の必要性が示された。

シンポジウムは、鹿児島における貧困問題への地域実践の報告が3氏から行われた。それぞれ鹿児島県の中でも離島、鹿児島市以外の町村、鹿児島市でという地域性を表すものであった。最初に、離島における実践として麓由理子氏（保健師）より、鹿児島県最南端にある与論町における実践を、ユタイバーのこころ（助け合いのこころ）を持ってが、紹介された。顔見知りで近い関係と、親しい関係での迷惑をかけられないという難しさが、住み慣れた場と逃げ場のない関係のなかでの地域づくりの課題が示された。

続いて、人口2万人のさつま町における「社会福祉協議会」の実践が、柳田道輝氏から報告された。「結」の意識が残っている地域において、8050世帯の孤立状態への支援が例に示され、そこから町としての課題と今後の方向性が検討された。見守り、支え合いを行うことで地域を高めることが示されました。

最後に、当事者による支援の実践からというテーマで、都市部である鹿児島市でソーシャルワーク実践を行っている鶴田啓洋氏からの報告だった。自身のソーシャルワーカーとしての活動を「資源開発経緯」としてまとめて振り返り、同氏の現在の実践課題を事例から明らかにしていた。論点は“生活に必要なものがあるか”、“相談できる人がいるか”、“困りごとを正しく伝え、誰かを信じ、将来への希望を持つことできるか”だった。これまでの全体の議論を、利用者の視点から捉え、ソーシャルワーカーの実践課題を明確にするものになったと言えよう。

最後にコラボ全体を通しての私の発見を伝えたい。ソーシャルワーカーは、個々の分野で実践をしているのだが、同時に分野での専門性で身を守ってしまっている現実がある。地域において分野を越えて動けるソーシャルワーカーが必要ということは明らかである。ただし、ソーシャルワーカーだけでは限界がある。地域の一人ひとりの望む生活を可能とするためには、地域で支援のために動ける人を見つけることがソーシャルワーカーの役割となる。さらに、動ける人を育てることだ。実践を地道に行っていくと、ソーシャルワーカーに今求められている役割が明らかになるのが面白い。

## 「ソーシャルワーク・コラボセミナー in 鹿児島」に参加して

鹿児島県社会福祉士会研修委員長 毛利 美希

令和2年11月8日に日本ソーシャルワーク学会と鹿児島県社会福祉士会のコラボ企画として「貧困問題への地域福祉実践～地域固有の知への可視化、そして共通に向けて～」と題し、ソーシャルワーク・コラボセミナー in 鹿児島を開催しました。新型コロナウイルスの影響もあり、今回はオンライン開催となりました。当会と致しましても「オンライン、ということに慣れない中、日本社会事業大学 大島巖教授をはじめ、日本ソーシャルワーク学会の先生方にご教授いただきながら、大会の準備を進めてまいりました。打ち合わせもオンラインで行い、なかなか当日の様子を想像できない不安の中ではありましたが、当日は100名を超える方々にご参加いただき、大変嬉しく思っております。また、滞りなくセミナーを進行することが出来たこと、関係者の皆様にご参加いただきました皆様へ心より感謝申し上げます。

セミナーでは基調講演を「包括的な支援体制の構築と越境する地域福祉実践」と題しまして同志社大学 永田祐教授よりご講演いただきました。永田教授は鹿児島にご縁があるというお話をお聞きすることができ、オンラインで離れた場所ではありましたが、とても近く感じられ嬉しく思った次第です。講演では多様

化する生活問題に対し、縦割りの制度でソーシャルワークが機能していないことに触れ、2017年の社会福祉法改正により「包括的支援体制整備」が位置付けられ、また2020年に「重層的支援体制整備事業」が整備された背景や事業の内容について詳しくご講演いただきました。相談支援体制を庁内の部署や様々な機関が縦割りではなく、まさに「越境、した他機関協働のネットワークを構築していくことの重要性について、またその中で中核となるソーシャルワーカーのあり方について学びました。

シンポジウムでは「貧困問題への地域福祉実践～地域固有の知への可視化、そして共有に向けて～」と題し、3名のシンポジストに報告していただきました。鹿児島県は南北600Kmからなり、大小合わせて600を超える島数があります。地域には様々な特性や習慣があり、地域における貧困問題について、機関の垣根を超えてまたは、支援者と当事者の垣根を超えて（越境）、協働しソーシャルワーク実践されていることについて、ご報告いただきました。また日頃より鹿児島の地域福祉にご尽力されている、コメンテーターの鹿児島国際大学 高橋信行教授より、さらなる鹿児島の様々な地域固有の福祉実践についてもご教授いただきました。

体験したことのないコロナ禍でのセミナー開催となり、皆様に鹿児島にお越しいただくことが出来なかったことが心残りとなりました。鹿児島には、まさに地域特有の美味しい食事や温泉、素晴らしい自然が数多くあります。今回は、ぜひ鹿児島にお越しいただき、実際に鹿児島を満喫していただくこと、またいち早く新型コロナウイルスが終息し、直接、皆様にお会いできることを祈念し、お礼のご挨拶とさせていただきます。

この度は貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

## Ⅲ. 「2020年度RSW共同研究会」報告

### 本学会と全国母子生活支援施設協議会による共同研究に関するシンポジウムの開催

仙台白百合女子大学 / 学会理事 研究推進第2委員会、研究推進第3委員会 白川 充

2020年度より、研究推進第2委員会において、全国母子生活支援施設協議会と日本ソーシャルワーク学会による施設ソーシャルワークに関する共同研究がスタートした。今回のシンポジウムはこの共同研究の一環である。

2020年11月28日（土）、仙台白百合女子大学において、コロナ禍の隙間について対面で開催されたシンポジウムは以下のような内容であった。

#### テーマ：「母子生活支援施設におけるソーシャルワーク実践の現状と課題 －困難ケースへの対応とRSW実践の定着を目指して－」

コーディネーター：白川充（仙台白百合女子大学 人間学部教授）

シンポジスト①：芹澤出（全母協副会長・野菊荘施設長）

シンポジスト②：瀬戸亜矢子（仙台つばさ荘 母子支援員（社会福祉士））

シンポジスト③：芳賀恭司（東日本国際大学 健康福祉学部准教授）

対 象：施設職員と教員・学生ほか30名まで

日 時：2020年11月28日（土）13時から16時30分

場 所：仙台白百合女子大学5号館521教室

本シンポジウムの目的は、母子生活支援施設が抱える困難ケースへの対応の実際について理解を深め、その専門的な実践を支える RSW のあり方について検討することであった。最初に、芹澤氏より、全母協副会長の立場から、全国の母子生活支援施設が抱える困難ケースの実情と支援活動における共通課題について報告していただいた。次に瀬戸氏より、具体的な事例をもとに、支援における母子支援員（社会福祉士）としての専門性とそれを担保するコンピテンスについて報告していただいた。そして最後に、芳賀氏より、母子生活支援施設を含む社会福祉施設におけるソーシャルワーク実践の現状と課題について報告していただいた。その後、母子生活支援施設が抱える困難ケースへの対応とその専門的な実践を支える RSW のあり方について検討した。

参加者は施設職員が 15 名、福祉行政、病院等の関係者が 7 名、学生が 8 名の合計 30 名であった。各シンポジストの報告の後の質疑応答で浮き彫りとなったのは、母子生活支援施設に入所している母子世帯が抱える生活課題の困難さと、一方で、施設職員のソーシャルワークに関する認識の希薄さであった。母子生活支援施設における「実践」において、ソーシャルワークが役に立つことを示していくことが課題であり、その責任の重さを痛感した。

本学会と全母協の共同研究は、残念ながらコロナ禍のため当初の計画通りには進んでいない。ただそこを何とか乗り越え、2021 年度に向けて、この共同研究を当初の計画に戻したいと考えている。その点では、今回のシンポジウムは共同研究の停滞に刺激を与えると同時に、次に進める起点になったと思われる。

## 2020 年度 RSW 共同研究会シンポジウムに参加して（感想）

「母子生活支援施設にも SW を」というテーマは母子支援施設に勤めて 18 年の私にとって新鮮で魅力的なテーマです。

母子生活支援施設では母子支援員も少年指導員も保育士も、母子の生きづらさに直面し支援の難しさを痛感させられる日々です。困難を抱えているケースだからこそ入所していると受け止め、より良い支援とは何か？と悩みながら対応しているのが現状です。

白川先生の「現場はもっと学びが必要」という言葉が私にはとても耳の痛い言葉として残っています。今回のシンポジウムに参加し、母子支援員が SW を担っていくイメージではなく、既存の職種にプラスして SW 専門の職員が加わることで、家族全体の支援を組み立てていけるのかなと感じました。母子にとってのメリットは勿論ですが、今後の児童福祉を担っていく若い世代の人たちが「母子生活支援施設＝大変」ではなく、魅力ある仕事として認識してもらうためにも、RSW 定着が一つ大きな役割を果たしてくれるのではと期待が膨らみました。

宮城県さくらハイツ  
主任母子支援員 村山 尚子

シンポジウムを通して、母子生活支援施設が置かれている現状、そして、母子生活支援施設における SW 実践の必要性を再確認することができた。

母子生活支援施設における支援は、ケアとしての生活支援だけでは不十分であり、母や子の個人としての最善の利益を保障するために行われるべきである。また、母と子が共に生活できる唯一の児童福祉施設として、その特性を生かしながら、母と子を家族という一つのシステムとして捉え働きかけることが重要である。このような中で目指すべき自立とは、母や子が暴力や貧困などの危機的状況から抜け出すだけでなく、自分の意思で課題と向き合い解決できる力を取り戻し、自己実現に向けた途を歩める状態になること。更には、課題を抱えながらも、地域で安心した生活が営めるようになることなのではないかと考える。

現場において困難ケースへの対応が求められている今、経験や勘に基づく支援ではクライアントの最善の利益の保障は難しく、価値や理論に基づいたSW実践が求められる。更には、地域を基盤としたSW実践、個と地域の一体的な支援がなければ、本当の意味での自立は難しい。

私自身、児童福祉の現場で働く社会福祉士として、一人でも多くのクライアントを救えるよう自己研鑽に努めたい。

八戸市健康部（福祉事務所）こども家庭相談室  
主事兼社会福祉士 田村 祐衣

シンポジウムに参加して、母子生活支援施設の現状と実際の事例から、母子生活支援施設におけるソーシャルワーク実践のあり方やソーシャルワークの位置づけについて改めて考えるきっかけになったと感じる。

母子生活支援施設が抱えるケースには、多様なニーズ、様々な課題を抱える世帯が増えている現状がある。そのような困難ケースを支援していくには、ソーシャルワークの思考を持ち、根拠に基づいたアプローチ、母子が地域で安定して生活を送れるよう、地域を基盤としたソーシャルワークが必要であることを実感した。

現場の実践のレベルを高めていくには、経験知や暗黙知だけでなく、理論に結び付けていく作業や自分自身の実践を振り返ることが重要であり、さらにはそれをシステムとして捉えていくことが肝要であると改めて理解することができた。現場において、ソーシャルワーク実践がどのような位置づけとして機能しているのか、その枠組みの整理をどのように進めていくのか、という点についてはもっと理解を深めていきたいと考える。

今回、シンポジウムに参加し、現場でのソーシャルワーク実践を明確に示していくことこそ、ソーシャルワークの専門性や後継者育成にもつながっていくのではないかと再認識させられる機会でもあった。今回学んだことを今後活かせるよう、精進していきたい。

仙台市児童相談所  
児童福祉司 佐藤 千草

## IV. 「国際委員会」報告

### コロナ禍に対するソーシャルワーク対応の世界動向 ～国際的な業界団体を中心に～

ヴィラーグ ヴィクトル  
長崎国際大学 / 学会理事 国際委員会 Virág Viktor

本稿では、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行における国際的なソーシャルワーク業界の動きについて取り上げる。パンデミック発生後に、国際ソーシャルワーク学校連盟 (IASSW)<sup>1</sup>と国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW)<sup>2</sup>のホームページに掲載された主要なニュース・アイテムなどに基づいて、2020年2月から9月までみられてきた専門業界の世界動向について整理する。

それぞれの団体において、コロナ禍に関する最初のニュースが届いたのは2月の前半である。IASSWの災害介入・気候変動・持続性委員会は、2月11日に中国のソーシャルワーカーとの連帯声明<sup>3</sup>を発行した。

1 [www.iassw-aiets.org](http://www.iassw-aiets.org)

2 [www.ifsw.org](http://www.ifsw.org)

3 <https://www.iassw-aiets.org/featured/4468-iassw-stands-with-social-workers-in-china/>

また、IFSW は、2月13日に中国ソーシャルワーカー協会による活動報告<sup>4</sup>がニュースとして掲載された。その後、両団体とも新型コロナウイルス感染症に関連する情報を発信するための専用サイトを開設した。3月1日に立ち上がったIFSWの専用サイト<sup>5</sup>には、各種声明文、事務局長やそれぞれの地域会長と各種委員長の動画メッセージの他に、各加盟国のニュースが載るようになり、事例を中心として5ヶ月<sup>6</sup>と6ヶ月<sup>7</sup>の総括報告もまとめられた。そして、IASSWの専用サイト<sup>8</sup>は3月24日に発足し、会長と災害介入・気候変動・持続可能性委員長の動画メッセージに加え、様々な関連情報が発信されてきた。また、各会員校の実践について共有する記事を投稿するように呼びかけられた。なお、ソーシャルディスタンスの一般化に伴い、「人間関係の重要性」をテーマにした2020年3月17日の世界ソーシャルワークデーのポスターのイメージ図は、もともとの握手から、接触のないお辞儀の絵に変更された。

コロナ禍専用サイトには、両団体が初期の段階で各種ガイドライン等を掲載した。IASSWは、ソーシャルワーク全般<sup>9</sup>と社会福祉分野別<sup>10</sup>のパンデミック対応のガイドラインに加えて、遠隔教育<sup>11</sup>に関するものを公開している。同じく、IFSWの主要な関連ガイドラインは、コロナ禍対応のソーシャルワーク実践における倫理的な意思決定<sup>12</sup>と社会福祉従事者の安全及びウェルビーイング<sup>13</sup>に関するものである。さらに、両団体では、特に各地域レベルのウェビナー等が多く開催され、IFSWは主に子ども分野の無料オンライン研修<sup>14,15</sup>も共催している。

また、両団体とも早い段階で緊急調査を行っている。IASSW関連の研究者ネットワークでは、日本と中国を含む計17カ国の状況について報告の提出を促し、6月19日にそれらを編集した報告書<sup>16</sup>が発行されている。本報告書は、書籍として出版が予定されており、また11月の公開を目指して、日本からの報告の担当者によって、各国報告の日本語への翻訳も取り組み中である。報告書では、新型コロナウイルス感染症について、様々な社会福祉制度や組織の運営方法及びサービス提供ロジスティクス経路、そしてソーシャルワークにおける対人の人間関係に打撃を与えたと位置づけられている。その中で、特に差別などの社会的な影響を含めて最も傷つきやすい人々の保護と権利擁護がソーシャルワークにとって急務であると述べられている。多くの国々でみられた共通の問題として、外出制限の下で家庭内における女性の負担増加と暴力被害、また子ども及び高齢者虐待が取り上げられた。他にも、脆弱性が明らかになったのは、ソーシャルディスタンスが成立しにくいホームレス支援分野と、集団生活が主流の入所施設である。国によっては、死者を適切に見送る限界や、必要物資（防具、食料など）の不足がみられた。そして、長期的に見込まれる経済不況の影響も懸念される。ソーシャルワーク専門職の反応としては、ICT活用の向上、防具や食料配布のように現物給付の復活、また行政を含む多機関間の連携において情報交換や手続きの簡素化を挙げることができる。

4 <https://www.ifsw.org/chinese-social-workers-actively-engaged-in-the-fight-against-the-corona-virus/>

5 <https://www.ifsw.org/updated-information-on-ifsw-and-the-covid-19-virus/>

6 <https://www.ifsw.org/covid-19-the-struggle-success-and-expansion-of-social-work/>

7 <https://www.ifsw.org/the-social-work-response-to-covid-19-six-months-on-championing-changes-in-services-and-preparing-for-long-term-consequences/>

8 <https://www.iassw-aiets.org/covid-19-updates/>

9 <https://www.iassw-aiets.org/featured/4642-covid-19-updates-from-iassw/>

10 <https://www.iassw-aiets.org/covid-19/4890-child-protection-and-welfare-under-covid-19/>

11 <https://www.iassw-aiets.org/covid-19/covid-19-teaching/4736-online-teaching-during-covid-19-outbreak/>

12 <https://www.ifsw.org/ethical-decision-making-in-the-face-of-covid-19/>

13 <https://www.ifsw.org/social-service-workforce-safety-and-wellbeing-during-the-covid-19-response-recommendation-actions/>

14 <https://www.ifsw.org/new-free-online-course-child-protection-case-management-in-times-of-covid-19/>

15 <https://www.ifsw.org/popular-free-training-for-social-workers-on-alternative-care-now-touches-on-covid-19/>

16 <https://www.iassw-aiets.org/covid-19/5369-covid-19-and-social-work-a-collection-of-country-reports/>

7月2日に発行されたIFSWの緊急報告書<sup>17</sup>は、倫理上の課題をテーマとし、54カ国から607件の回答を分析している。コロナ禍において、ソーシャルワーク実践に様々な制限がかかる一方、新たなるニーズの浮上と従来ニーズの拡大の問題が指摘されている。その中で、主要な倫理的な課題やジレンマのよくみられるパターンとして、次の6点が挙げられる。

1. 遠隔や防具を通じた実践における関係構築・維持の問題と、プライバシー保護及び守秘の葛藤
2. 拡大し続けるニーズと、制限された資源の活用間に生じる葛藤
3. クライアントの個別な権利の保障やサービス提供に対する使命と、利用者や支援者などの他者への感染リスク管理の間に生じる葛藤
4. 行政と所属機関などによる各種指針やガイドラインと、専門職としての判断及び専門的な裁量の間に生じる葛藤
5. 危険やストレスの多い環境下での情緒・疲労の自覚及び管理などのセルフケアの必要性
6. コロナ禍の教訓を基に、未来に向けてソーシャルワークの在り方の再考

しかし、興味深いことに、総会及び世界大会の開催を巡って、IASSWとIFSWの間に大きな差がみられた。IASSWは、6月30日に約200人の参加者を対象にZoomによるオンライン総会<sup>18</sup>をリアルタイムで開いた。同じ時期にイタリアのリミニでの開催が予定されていた世界大会については、11月までの延期を経て、総会時に対面実施の中止が決まり、最終的には10月1日に全面中止<sup>19</sup>となった。但し、一部の基調講演についてはウェビナー、受理された発表については要旨集の発行が予定されている。対照的に、IFSWの総会<sup>20</sup>は、7月11日から13日にかけて、各地域間の時差の意問題に配慮しながら、事前に記録された動画や書き込み形式を活用して行われ、91カ国より226人が参加した（加盟国の約7割）。なお、カナダのカルガリーで開催予定であった世界大会<sup>21</sup>は、完全にオンラインに移り、182カ国より20,043人の登録者を迎えるなど、前代未聞の包摂性をもって、7月15日と19日の間に開かれた。

IFSWと各加盟国のソーシャルワーカー協会は、各種声明文の発行を中心に、パンデミックに関するソーシャルアクションにも従事してきた。IFSWによる主な声明文等は以下を含む。

- 3月1日と3月11日：イベント開催に係る指針とソーシャルワークの役割の明確化<sup>22,23</sup>
- 3月15日：世界医師会や国際看護師協会の医療従事者専門職団体への公開感謝状<sup>24</sup>
- 3月26日：コロナ禍後の世界ビジョンの提示<sup>25</sup>
- 3月30日：無料のサービス解放について通信企業への人道的な配慮の呼びかけ<sup>26</sup>
- 4月9日と5月6日：女性殺人と対女性暴力に関する警告<sup>27,28</sup>

さらに、以下は各国のソーシャルワーカー連盟が発行した関連声明文の中での主要なものまとめである。

- 3月21日：イタリア・ソーシャルワーカー協会が他国に防具などの救援物資を依頼（6月21日に公開

17 <https://www.ifsw.org/study-of-the-ethical-challenges-faced-by-social-workers-during-the-covid-19-pandemic-published/>

18 <https://www.iassw-aiets.org/featured/5479-iassw-online-general-assembly-2020/>

19 <https://www.iassw-aiets.org/uncategorized/5703-cancellation-of-swesd2020-conference-to-be-held-in-rimini-italy/>

20 <https://www.ifsw.org/the-social-work-profession-celebrates-inclusive-and-united-general-meeting/>

21 <https://www.ifsw.org/ifsw-conference-concludes-a-new-era-for-social-work/>

22 <https://www.ifsw.org/update-on-the-corona-virus-for-ifsw-members/>

23 <https://www.ifsw.org/statement-on-ifsw-and-covid-19/>

24 <https://www.ifsw.org/an-open-letter-to-the-international-council-of-nurses-and-the-world-medical-association/>

25 <https://www.ifsw.org/as-social-workers-work-through-the-covid-19-crisis-we-work-towards-a-better-world/>

26 <https://www.ifsw.org/humanitarian-request-to-telecommunication-business-owners/>

27 <https://www.ifsw.org/femicides-when-you-live-with-the-murderer-a-reading-in-times-of-compulsory-social-isolation/>

28 <https://www.ifsw.org/violence-against-women-must-end/>

感謝状)<sup>29,30</sup>

- 3月21日：イラン・ソーシャルワーカー協会が国際社会に医療品等の貿易規制の緩和を要望<sup>31</sup>
- 4月2日：英国ソーシャルワーカー協会協会が首相に防具等を要望<sup>32</sup>
- 4月22日：ルーマニア・ソーシャルワーカー協会が政府に入所者と一緒に長期隔離中のソーシャルワーカーの特別手当を要望<sup>33</sup>
- 5月4日：フィリピン・ソーシャルワーカー協会が政府に最前線で公務を果たすソーシャルワーカーの危険手当を要望<sup>34</sup>
- 6月14日：ハンガリー・ソーシャルワーカー協会が首相に防具等を要望<sup>35</sup>

その他のニュース・アイテムは次を含む。IASSW の実践共有の呼びかけに対して、ソーシャルワーク校と教員及び学生の活動を中心に、計14カ国ほどの記事が投稿されており、中国が最も多い(14件)。また、IFSW の新型コロナウイルス感染症に関する各国ニュースは計40カ国(加盟国の約3分の1)に及んでおり、残念ながらパンデミックの犠牲となったソーシャルワーカー(アメリカのNatasha Ott氏<sup>36</sup>と南アフリカのConny Nxumalo氏<sup>37</sup>)に関する記事も含む。

## V. 「第38回大会」開催案内

### 2021年度日本ソーシャルワーク学会 第38回大会開催速報

北海道医療大学 / 学会理事 研究推進第2委員会担当副会長 **志水 幸**

第38回大会は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、特定の開催校を設定せずに理事会(研究推進第2委員会を中核として)および会員有志による実行委員会を組成し大会運営を行います。以下、現時点(2021年1月24日開催:2020年度第3回理事会現在)における開催概要をお知らせいたします。

### テーマ：ソーシャルワークの新たな地平—継承と刷新—

趣 旨：2014年の「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の採択以降、2016年には「アジア太平洋地域における展開」が、翌2017年には「日本における展開」が採択されている。まさに現代のソーシャルワークは、新たな地平に立っているのである。また、2018年には新たな「グローバルソーシャルワーク倫理原則声明」が採択され、それを受け現在は2020年～2030年までの「グローバルアジェンダ」への取り組みが展開されているところである。殊に昨年は、わが国でも「ソーシャルワーカーの倫理綱領」が改訂され、国際的にも新たな「ソーシャルワーク教育および訓練のためのグローバルスタンダード」が改訂されたところである。この状況に鑑み、第38回大会では、

29 <https://www.ifsw.org/an-urgent-message-from-paola-pontarollo-president-of-the-italian-association-of-social-workers/>

30 <https://www.ifsw.org/the-italian-association-os-thanks-ifsw-for-their-support-during-covid-19/>

31 <https://www.ifsw.org/iranian-association-of-social-workers-calls-for-lifting-the-trade-sanctions-of-medical-supplies/>

32 <https://www.ifsw.org/united-kingdom-open-letter-to-prime-minister-to-support-social-workers/>

33 <https://www.ifsw.org/romania-asproas-asks-the-government-of-romania-for-financial-compensation-for-social-assistance-staff-forced-to-isolate-themselves-at-work/>

34 <https://www.ifsw.org/philippines-request-of-the-pasw-to-the-department-of-interior-and-local-government/>

35 <https://www.ifsw.org/hungary-open-letter-to-prime-minister-to-support-social-workers-during-covid19/>

36 <https://www.ifsw.org/ifsw-mourns-the-passing-of-a-social-worker-who-died-while-waiting-to-have-a-corona-virus-test/>

37 <https://www.ifsw.org/global-social-work-community-morns-the-passing-of-conny-nxumalo/>

国内外の一連の状況の正確な理解にもとづき、これまで培ってきた伝統的なソーシャルワークの継承すべき遺産と新たな潮流への刷新、さらには日本的な展開のあり方について議論したい。

期 日：2021年7月17日（土）～18日（日）

開催形式：オンライン形式（Zoom）によるライブ配信

プログラムの概要：

大会初日の午前中は「ソーシャルワーカーの倫理綱領」に係る基調講演、午後は「ソーシャルワーク教育および訓練のためのグローバルスタンダード」に係る学会企画シンポジウム等を予定しております。また、大会2日目の午前中は、これまで学会企画シンポジウムや研究セミナーにおいて継続的に議論してきたプログラム評価に係る学会企画シンポジウムを、午後には自由研究報告を予定しております。

今後、大会企画の進捗状況につきましては、学会公式サイトやメルマガ・ニュースレター等の媒体を通じて適宜お知らせいたします。第38回大会につきまして、次年度のみなさまのスケジュールにお加えいただければ幸いです。多くの会員のご参加をお待ちしております。

## VI. 「2020年度研究セミナー」開催案内

### 2020年度日本ソーシャルワーク学会研究セミナー

テーマ：「コロナ渦中のその先を見据えたソーシャルワーク—1年間の変化と今後の展開に向けて」

趣 旨：

私たちが新型コロナウイルスの影響を受け始めて約1年が過ぎた。国内で感染が拡大し始めたことを受け、2020年3月からは全国的な学校の一斉休校、様々な人の集まる会合の中止、4月に緊急事態宣言の発令と、人々の活動は一部を除き多くを停止することを余儀なくされた。しかし、第2波、第3波と感染拡大と医療崩壊はより深刻な問題となっているものの、人々の生活はICTの活用や予防策を講じてできる限り日常活動を継続していこうとするように人々の行動は変容してきている。その中で、福祉は医療と同様に感染拡大当初より動き続けなければならない分野として、多くの専門職が現場で日夜支援を継続してきた。

『新型コロナウイルスとソーシャルワーク国別報告集』（2020.11月）によると、日本のソーシャルワークの対応の中で「多くのソーシャルワーカーが現場で倫理的なジレンマを経験しているという（JFSW、2020）。例えば、感染拡大のために包括的なアセスメントやケアカンファレンスを行うことができない。そのため、クライアントやその家族のニーズが十分に評価されず、必要なサービスを調整することができない。また、社会的な距離感や資源の不足により、孤立や不安の中で情緒が不安定になっているクライアントやサービス利用者に対して、適切なサービスを提供することが困難である。」ことの現状が指摘されている。

本セミナーでは、様々な分野での現在のソーシャルワーカーが置かれている状況報告を伺い、喫緊の課題は何か、また実践者の声から求められている研究は何かについて考える機会としたい。

○日 時：2021年3月28日（日）13時～15時30分

○場 所：オンラインズーム

○シンポジスト

- 13:00～13:10 挨拶 企画の主旨
- 13:10～13:50 新型コロナウイルスとソーシャルワーク 和気純子氏（東京都立大学）
- <報告>
- 13:50～14:10 病院の現場から 千葉県急性期対応病院医療ソーシャルワーカー 吉野孝氏
- 14:10～14:30 学校の現場から 江戸川学園おおたかの森専門学校学生相談室  
東京都23区スクールソーシャルワーカー 吉田万理恵氏
- 14:30～14:50 福祉施設の現場から 札幌市デイサービスセンター緑愛園生活相談員 杉江里歩氏
- 14:50～15:10 地域社会の現場から 石狩市社会福祉協議会地域福祉課長 久保田 貴浩氏
- 15:10～15:25 質疑応答
- 15:25～15:30 コメント 志水 幸氏（北海道医療大学）
- 参加費は無料です。学会ホームページよりお申込みください。（申し込み期限3月25日）

## Ⅶ. 「2020年度第3回理事会」報告

### 日本ソーシャルワーク学会 2020年度第3回理事会議事録

○日時：2021年1月24日（日）17時～19時 WEB（ZOOM）会議

○出席・欠席者一覧

役職	氏名	所属	出欠
会長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	久保 美紀	明治学院大学	出
	志水 幸	北海道医療大学	出
	大島 巖	日本社会事業大学	出
	空閑 浩人	同志社大学	出
理事	池田 雅子	北星学園大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	浅野 貴博	ルーテル学院大学	出
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	岡田 まり	立命館大学	出
	佐藤 俊一	淑徳大学	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	出
	杉野 聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	出
	保正 友子	日本福祉大学	出
	ヴァイラーグヴィクトル	長崎国際大学	出
監事	黒木 保博	長野大学	欠
	岡本 民夫	同志社大学名誉教授	欠
庶務	野村 裕美	同志社大学	出

### ◆各委員会より2020年度事業及び活動進捗報告

1. 「研究推進第一委員会」（久保委員長ほか各委員）より以下の通り、報告・提案があった。

(1) 学会誌編集委員会

①学会誌編集進捗状況

学会誌第 41 号 2020 年 12 月発刊済み（投稿論文 4 本うち採択 1 本、書評、グッドプラクティショナー）

学会誌第 42 号 2021 年 6 月発刊予定（投稿論文 3 本、資料解題 1 本、査読依頼中）

②書評リプライ創設の提案（学会誌上で著者と評者の議論が展開されることで、学会員の学びを促し、紙面の充実にもつながる）

③その他

41 号の投稿論文のなかで、専門職団体への依頼の詳細は書かれているものの、所属研究機関の研究倫理審査を受けておらず、採択不可となったものがあつた。学会の研究倫理指針に、倫理的配慮として「研究代表者もしくは共同研究者の所属組織に倫理審査委員会が設置されていれば、原則として審査を受けなければならない」とある。投稿原稿チェックリストには、「日本ソーシャルワーク学会研究倫理指針に反していないか」のチェック項目があるが、投稿規程には必ずしも明記されていない。また、「原則として」の解釈が曖昧との意見もあつた。研究機関に所属せず、倫理審査委員会のない実践現場の方が投稿しようとする場合、職能団体等によっては会員サービスとして倫理審査を実施しているところもある。各職能団体の情報を入手するとともに、編集委員会としての対応に一貫性をもたせる必要がある。

→書評リプライの新設について了承された。倫理審査について、今後、委員会として投稿規程の見直し、査読等審査に関わることについて論点提示して、引き続き協議していくこととなった。

(2) 学会賞選考委員会

現在、対象文献のリストを作成中。会員からの推薦（締切：2021 年 1 月末日）を含めて選考作業に入る。

→新年度大会前の理事会で、受賞候補者および候補文献の提案予定。

(3) 研究奨励委員会

会員研究奨励費の募集を MM、HP などで行う。締切は例年通り 2021 年 5 月末日とする。

2. 「研究推進第二委員会」（志水委員長ほか各委員）より以下の通り、報告・提案があつた。

(1) 2020 年度第 37 回大会報告

大会日時：2020 年 7 月 4 日（土）・5 日（日）

大会テーマ：「ソーシャルワーカー地域・文化固有の知を基盤として」

大会担当校：鹿児島国際大学（オンライン開催）

(2) 2021 年度第 38 回大会について

→2021 年 7 月 16 日（土）・17 日（日）に開催ということで決定。今年度同様、大会校に依頼するのではなく、学会主催のオンライン開催とする。大会参加費等の金額や課金システムの導入、ランチタイムミーティングの提案、懇親会の提案、大会資料の整理等なども検討していく。シンポジウム・テーマは、「ソーシャルワーク教育の新しいグローバル・スタンダードの可能性について」としたい旨提案があり、了承された。

(3) 2020 年度研究セミナーの開催について

→テーマを「コロナ禍中のその先を見据えたソーシャルワークの展開に向けて」（仮）として、3 月 28 日（日：13 時～15 時 30 分）開催に向けて検討準備中。詳細決まれば会員に周知する。

(4) 以下の共同研究について、それぞれ進捗状況等の報告があつた

1) 「実践家と協働で進める効果的福祉実践プログラムモデル形成評価研究会」

2) 「日本のソーシャルワーク研究に関する俯瞰的・包括的研究会」

3) 全母協と本学会との RSW 共同研究

（2019 年度大会（於淑徳大学）の学会企画シンポジウムから継続しての共同研究）

3. 「研究推進第三委員会」（大島委員長ほか各委員）より、以下の通り報告・提案があった。

(1) 出版・教材開発班

2021年6月5日日本医療社会福祉協会全国大会にてワークショップ（定員100名）を開催する旨報告があった。

(2) 社会貢献推進班

・2020年度「ソーシャルワーク・コラボセミナー in かごしま」報告

開催日時：2020年11月8日（日）（\*オンライン開催）

テーマ：「貧困問題への地域福祉実践～地域固有の知の可視化、そして共有に向けて～」

→都道府県社会福祉士会との連携は2回目、地方の社会福祉士会とのコラボが魅力であることとなど、大島・浅野両先生より報告あり。セミナー資料のホームページへの掲載等提案され、了承された。

4. 総務委員会（空閑委員長ほか各委員）より、以下の通り報告・提案があった。

(1) ニュースレターの発行

・第128号は2020年6月発行済、第129号は2021年3月発行予定

(2) メールマガジン（MM）の配信

・第78号（2020年4月配信）～第87号（2021年1月配信済）の毎月配信

(3) ホームページの運営管理

→大会資料やコラボ資料等のアーカイブ機能を備えたコンテンツ等の追加等、ホームページの一層の充実に取り組む

(4) 学会広報（会員拡大）のための「プロモーション動画」作成について

→委員会より作成について提案があり、今後詳細を委員会で検討することになった。

(5) その他・庶務事項等

・理事会の開催報告

2020年度第1回：2020年5月24日（日）13時～16時（\*web会議）

2020年度第2回：2020年6月27日（土）20時～22時（\*web会議）

2020年度第3回：2021年1月24日（日）17時～19時（\*web会議）

・正副会長会議の開催報告

2020年6月27日（土）19時～20時（\*web会議）

2020年11月7日（土）17時～18時30分（\*web会議）

2021年1月14日（木）19時45分～21時30分（\*web会議）

◆**会員の動向**（2020年6月27日～2021年1月21日）（→以下の方々の入会、退会について承認された）

○入会（13名）

	会員種別	氏名	所属
1	正会員	孫 心悅	同志社大学大学院
2	正会員	井上 夏子	神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部
3	正会員	館澤 謙蔵	いわくら病院医療福祉相談室
4	正会員	石川林太郎	相談室ぼらりす
5	正会員	古野 愛子	日本文理大学
6	正会員	安西 美咲	法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士後期課程
7	正会員	井上久美子	多摩市役所子育て支援課
8	正会員	福井 充	福岡市こども未来局企画課
9	正会員	小畑 美穂	同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程
10	正会員	渡邊 庸介	特定非営利活動法人生活支援舎
11	正会員	島袋 恭子	(公財) 沖縄県労働者福祉基金協会
12	正会員	木村 潤	国際医療福祉大学医療福祉学部医療福祉マネジメント学科
13	正会員	松尾 敬子	内閣府国際平和協力本部事務局

○退会（9名）

内田宏明、佐藤香奈子、高田明子、高橋一弘、竹中哲夫、西村真希、狭間香代子、宮澤明音、渡部律子

◆**2021年度第1回理事会日程について**（→2020年5月下旬に開催予定）

## Ⅷ. 会員の声（2020年度新入会員）

### 成年後見制度の社会化

明石市後見支援センター 香山 芳範

明石市後見支援センターの香山と申します。研究テーマは成年後見制度の社会化です。社会化を自治体職員として実践する取り組みとして、後見基金があります。後見基金のお金は主に、市民後見人の報酬にあてられています。最近では、後見基金の持続可能な運営を目指して、寄付つき商品の開発に力を入れています。具体的には、市民後見人と被後見人とで作り上げた音源をもとに作曲、それを音楽配信サイトで発信し、そこで生まれたお金を基金に組み入れるという取り組みです。被後見人の取り組みで生まれたお金を、被後見人を支える市民後見人の報酬にあてる、このような支え合う関係を、後見基金をもとに構築していきたいと考えています。

### 入会にあたってのご挨拶

全国社会福祉協議会 岸本 尚大

全国社会福祉協議会3年目職員の岸本尚大と申します。首都大学東京大学院（現・東京都立大学大学院）修士課程にて和気純子先生にご指導いただいた後、全社協に就職し、全国ボランティア・市民活動振興センターにおける全国の実践者や推進者へのマクロ的な支援、また出向先の名古屋市社協では地域における認知

症支援や新型コロナウイルス支援のメゾ、ミクロ実践に携わってきました。

現在、社会的孤立に陥りやすい人たちの生活実態の追究とそのSW実践のあり方全般に関心があります。修士時代に研究した民生委員活動や高齢者の地域生活への課題意識を抱き続けながら、最近はいくつかの業務経験から在留外国人への多文化的な支援にも関心があります。この学会を通して、会員の先生方からSWに向けた熱いエネルギーを吸収しながら、研究、実践ともに杓にとらわれずに学ばせていただきたいと思っております。若輩者ではありますが、どうぞよろしく願いいたします。

## ソーシャルワークを基盤とする研究を目指したい

同志社大学 姜 民護

この度、入会させて頂きました姜民護と申します。私は韓国出身です。2010年12月に来日し、同志社大学大学院社会福祉学専攻で博士前期・後期課程を修了しました。その後、同志社大学大学院の助手、大阪府立大学や大阪経済法科大学の客員研究員、同志社大学や関西学院大学、龍谷大学の嘱託講師を経て現職に至っております。

私の専門は、子ども家庭福祉です。主に「親の離婚を経験した子どもの支援づくり」に関する研究を進めてきております。近年では、領域を広げて「児童虐待のリスクアセスメントシート」「子どもの社会的・文化的貧困」「里親の不調」「保育士のコンピテンシー」「実習教育」などをキーワードとする研究にも関わらせていただいております。また、「社会福祉研究方法論」にも興味があります。

これからはさらに「ソーシャルワーク」を基盤とし、前述した研究らを進めていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

## スクールソーシャルワーク

島根大学 山口 倫子

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会させていただきました山口倫子です。これからお世話になりますが、よろしく願いいたします。

私は、大学や専門学校で社会福祉士及び精神保健福祉士の養成に携わる一方、スクールソーシャルワーカーとして10年以上実践をしてきました。現場実践を通じて、スクールソーシャルワーカーが抱えるさまざまな問題に直面し、改めて現場に還元できるスクールソーシャルワークの基盤となる研究を行いたいと強く思うようになり、今回入会するに至りました。

現在の関心事は、スクールソーシャルワーカーの配置類型による効果の違いについてです。私自身が配置型、派遣型それぞれのスクールソーシャルワーカーを経験し、学校や教育委員会との関係性や連携のあり方の違いを実感したことに端を発しています。子どもの最善の利益のために、どの地域でも安定的にスクールソーシャルワーク実践が展開できるためにはどうすれば良いかを考えて行きたいと思っております。

諸先生方のご指導を賜りながら、鋭意努力してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。

## 入会にあたって

秋田看護福祉大学 山田 克宏

皆様はじまして。秋田県大館市にあります秋田看護福祉大学の山田申します。本年度より本学会に加入させていただきました。大学では、介護福祉士養成、社会福祉士養成に携わっております。研究分野は、高齢

者福祉，地域福祉，障害者福祉分野を中心に，「看取りケア」「多職種連携」「精神障害者の地域移行」に関して「クライアントに対する支援者のかかわり方」「偏見・差別」の視点から研究を深めております。

具体的には，早坂泰次郎は「人を存在（いる）絶えず非存在（いない）へと転じる可能性とともにいることは避けがたいとしている」（1994：124）ように，関係性は近づき，離れるという両義性があり「ともにいる」という臨床的態度が問われます。そのような「関係性」に関して事例における支援者の介入（Intervention）行為との繋がりから実践知に関して明らかにしてまいりたいと思います。ご指導，ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

文献：早坂泰次郎（1994）『〈関係性〉の人間学』川島書店。

## IX. 自著紹介

秋元樹著『労働ソーシャルワーク—送り続けられたメッセージ／アメリカの現場から』Labor and Social Work—Messages Over the Decades From American Workplaces and Communities（旬報社、2019）578頁

淑徳大学 秋元 樹

なぜ日本のソーシャルワークは労働者（働く人々）の抱える困難、問題に関心を持たないで平気でいられるのだろうか。それがわからなかった。

関心を持たないなら持たないでいい。しかし、私は関心があった。そして書き続けた。

失業、<sup>ワーキングプア</sup>働く貧乏人、非正規低賃金不安定就労、労災・職業病、セクシャルハラスメントを含めた職場における差別・人権、児童労働、障がい・高齢と労働、労働相談、国境を越えた目。全12章にその姿が相当にビビッドに、かつそれへの対応リストとともに並べられている。70-90年代のアメリカが舞台である。

アメリカのソーシャルワークには私と関心をともにする研究者、現場のソーシャルワーカーがいた。当時の全米ソーシャルワーカー協会（NASW）会長マリアン・マハフィのご自宅が、この間の私の調査研究の基地であった。

本著はソーシャルワークの枠にのみ収まるものではない。出版直後からアメリカ労働史、労働社会学、階級・階層論、社会政策学、労使関係論、労働運動論、社会科学専門書出版社元編集者等いろいろな分野からの「書評」が届いた。「デトロイトの労働者の生活と感情を真正面から観察し、さらにそれをアメリカ全国の労働問題として体系化[する]」「現代社会において階層化する労働と生活のほとんどすべての課題を点検した上で、[労働ソーシャルワークの]定義に近づく」「“労働者階級の状態”研究[は]... “人間が人間らしく生きる社会を目指す研究”を志した者にとってはどうしても分け入らない訳にはいきません...。全体を包括的に構造的に捉えたい...」「“労働とソーシャル”“階級的”で“ソーシャル”に関する叙述」「働く側の視点で捉え直す喫緊の課題が本書には多数ある...。我々、日本人は単なる消費動物と化し、他者・弱者への思いは忘れ去り（余裕もありません）、ひたすら保身と儉安の生活に堕ちてしまいました」いろいろな読み方がある。

が、肝心のソーシャルワークからのものは届かなかった。30年40年たった今も日本のソーシャルワークは「労働」には関心を持たないようだ。

と思っていたところに、今回、日本のソーシャルワーク研究の柱であるソーシャルワーク学会が少しだけ関心を寄せてくださった。この上なくうれしい。厳しい建設的書評、批判が届けられていたならばもっとうれしかった。

日本ソーシャルワーク学会通信（ニュースレター）No.129をお届けします。本号は、巻頭言、2020年度コラボセミナー in 鹿児島報告、2020年度RSW共同研究会報告、2020年度第3回理事会報告、第38回大会開催案内、2020年度研究セミナー開催案内、会員の声（2020年度新入会員）、自著紹介と盛りだくさんの内容です。

さて、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大がなかなか収まりません。コロナ禍の長期化が予測されるなか、“with コロナ”という新しい言葉も定着しました。“with コロナ”の時代において改めて気付かされるのは、紙媒体で発行されるニュースレターの意義です。対面でのリアルな交流が制限されるなか、紙媒体のニュースレターは、実際に頁をめくりながら学会の情報を得る貴重な機会となっているように思います。

ご承知のとおり本学会は、メールマガジンが毎月発行されより新しい情報を知ることができます。今後も通信（ニュースレター）とメールマガジンが連携することで、有益な情報を会員の皆様にお届けしていきたいと思えます。より充実した紙面にするためにも、ご意見、情報などを学会にお寄せいただければ幸いです。

駒澤大学 荒井 浩道  
(学会理事／総務委員会)

#### ニュースレター発刊遅れについてのお詫び

本来であれば、2020年10月にニュースレターを発行する予定でした。担当者諸般の事情により発行できなかったことについてお詫び申し上げます。掲載予定であった記事は以下のとおりでした

・2020年度大会報告・・・初めてのオンライン開催でしたが参加申込者は170名であり、プレ行事（ワークショップ）以外のプログラムはライブ配信や映像配信を併用し、盛会の内に終了いたしました。ご参加いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。各会場の様子はメールマガジン第81号2020/07/13にて概要を速報としてご報告いたしました。

・2020年度総会報告・・・2020年度総会は、書面開催としてホームページ上で総会資料を公表しご意見を募りました。2019年度報告2020年度計画についてご承認いただきありがとうございます。

・2020年度第2回理事会報告・・・2020年6月27日（土）20時～21時30分にWEBで開催いたしました。議題は、37回大会直前の理事会として総会資料の確認、初のオンライン開催の進捗状況と進め方の確認を行いました。総会資料に掲載した各委員会の活動計画事業について協議を進めました。

報告事項がこのような概要のみになってしまったことについて、重ねてお詫び申し上げます。

江戸川学園おおたかの森専門学校 杉野 聖子  
(学会理事／総務委員会)

#### 【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル2F（株）ワールドプランニング内  
TEL：03-5206-7431 FAX：03-5206-7757  
E-mail：jsssw@zfhv.ftbb.net <http://www.jsssw.org>

